

播州名所巡覽圖繪 五



播磨名所巡覽圖會卷之五目錄

龍建鎮城成宮一社
寺院上寺

龍建川

三社明神

城山城趾

小柳清水

小神

梶山城趾

行徳驛

桑原神祠

袋尾神祠

南天燭大樹

赤松則勝墓

彦比良神社

中瀧寺

平井保昌墓

令則山城趾

龍門寺

空栗川

笹水清水

因融寺

修津の浦

熾山

多ひが溪 獅子岩 七曲舟 地獄谷
八梅松 山伏岳 炭焼谷 鋸口山 傾瀨岳

下ヶ溪

池乃溪

大光寺

門崎

室津

室明神

正殿 別雷堂を拜宮 庁園社を田社本社社
若宮社八幡宮 荒津 板尾社 柳尾社

岩神社 二層塔
河合社 稻子社

梶田祠 佐吉社
白旗社 権樓

小泉月神子

津宮寺送歸

天王祠

見性寺

津名寺

大雲寺

正洞院

正法寺

津運寺 女若墓



大聖寺	觀音寺	寂靜寺	德宗寺
不二庵	法釋院	沓茶庵	多喜大徳送跡
尾登浦	竹園尼	陀羅尼溪	柏浦
漱戸 <small>全修 寺</small>	燈籠堂	瓦川水	向灘
唐荷庵	那波城趾	陰村	那波 <small>日浦 日土修</small>
得宗寺	坂城浦	徳業寺	相眼寺
高通峯	大避明津	日濤 <small>君一ま 生修</small>	冰石明寺天津
妙見	常樂寺	日泊 <small>編一ま 小倉所</small>	石明津 物見
觀音寺	赤徳庵 <small>寛</small>	妙見山	徳後三郎墓
新渡村	唐船 <small>舟</small>	龜乃甲	尾修八藏宮
赤徳鎮城	花乐寺	日製	伊和都比賣神社
		中村	狛川
		忠義塚 日輝	遠林寺

大石屋敷	西山寺	大津	愛宕大授現
長樂寺	富浦 <small>あまのまへ</small>	八保 <small>不</small> 神社	若狭村
和泉武部宮本	文州川	有年 <small>林</small> 驛	高峯牛臥天王
冰渡寺	八百羅漢	矢野 <small>の</small> 里	有年城跡
遍照院跡	小鷹山	小鷹石	觀音寺
三本率都婆	宝林寺	光明山 <small>山</small> 城跡	無後山
法雲寺	白旗山 <small>古</small> 城	苔繩古城	感状山 <small>山</small> 城跡
鞍掛冰社	舟坂山	徳後三郎墓	僧惠 <small>使</small> 古法
大聖寺城跡			

播磨名所巡覽圖會卷之五

龍野鎭城

服坂原乃

新田義貞始て當國一國

又賜ふ義貞之びて

足利家より赤松則祐は賜ふ滿祐弒逆乃後ハ國を以て

後赤松政則は賜ふ延徳年中當城を構へ猶子政村は築城入

城を讓る足當城乃始て○領内ハ揖東揖西飾西三郡は跨る

莊廿一郷凡百五十一邑東ハ播磨西ハ那波野小丸丸より小は

香山聖岩と限り南ハ細于新在家東西南北三里余南北又里余

竈敷千軒許寺院十二ヶ寺氏宮一社別當正覺院

右の驛通ハ小丸より船泊の小幡後山下より書寫坂下より西郷をめぐり

大市郷相理中村のろくろの宿村あり夜比良の宿りと旅ハ布於又西

小丸丸光明山より下より多田野の廢とこき舟橋より山陽道これ今ハ道あり昔年記

又赤松勢取坂と先塞ぎ新田義貞先陣江田大嶽書取坂ハ着陣より今の樹及溪谷

燧石 厚紙 烟草入 岩油

○市三九日六日ありて完栗伏用赤穂新宮林田子を三月廿より来て慶安ハ

龍野川

川上ハ完東郡又流と

合す新野川

海に達ハ細海あり



三社明神 ○聖山といふ今の宮乃山なり
小山あり産靈神といひしハ
小津村あり大明三年亥樹

城山城趾 平安郷中内村あり赤松の即修禪寺義雅の居城之柳ヶ城山山谷波瀬ありと
南小沢陣の遺蹟の穀百里も眼下に遊り蘇幕又梅條川の大川あり細川山名乃雨勢
五万余務を以て敵を討つたは道二赤松元年九月十日城山の城一斤の烟とあり蘇幕又及ぶ
赤松元年より應仁元年と共七年の赤松家の中絶は同山名宗全の領あり

小柳清水 平安郷中内村あり
榎十水の其一あり 小津 小室郷小津村あり後醍醐の西之万幸
長者の宅地といふ今屋上と書け

梶山城趾 河内赤松内村あり谷沢田邊を即國氏
是と守る赤松年中赤松政村是と書け 行島驛 赤松内村あり赤松あり
室又ついで有年へつてあり

赤原神祠 川の辺 代衣尻神祠 代衣尻
赤松村 南天燭大樹 川の辺代衣尻あり赤松あり
希代乃大樹あり

赤松則勝墓 川の辺中陣城趾あり赤松あり
元久の居城之山城を築て討死 夜比良神社 赤松内村あり
今八段と書く川の辺

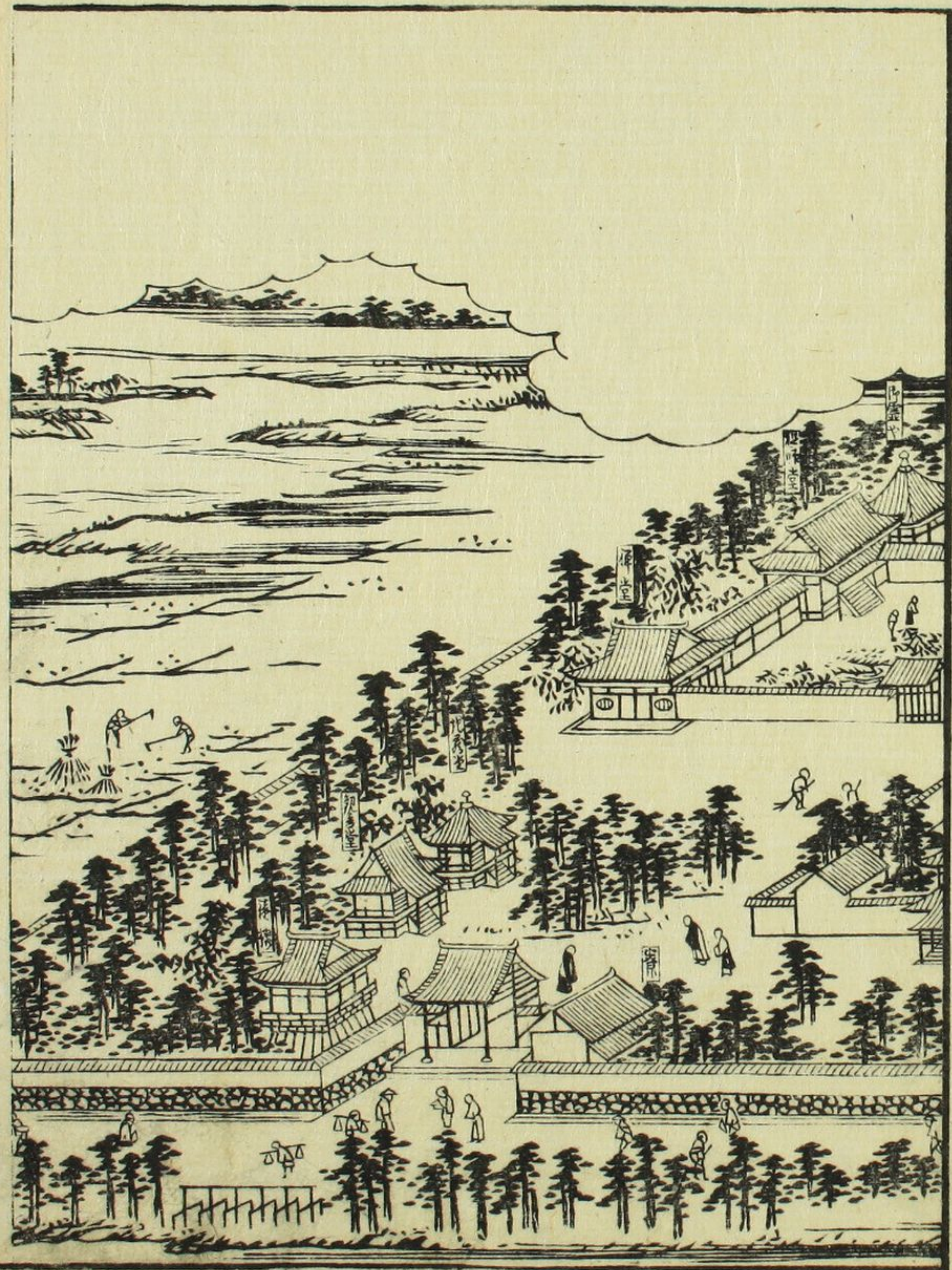
麻谷山中島寺 石見赤松
修村あり 平安保昌墓 平安村あり老後といふ地(雨)右にて
終を遂ぐ中をいふ修あり

令剛山城趾 佐々木三郎豊綱十二代加地元兵衛尉義綱嫡男加地刑部少輔信盛文明中
赤松政則の祖と云ふ是れ中水田乃城より安後より子息水田元近御監
室尚城と云ふ赤松八年細川政賢に属し松園山と我れ

天徳山龍門寺 細平溪田村 開基 盤珪和尚伽藍大地也
盤珪佛智禪師は播州揖西郡溪田郷の僧と云え元和八年三月の降

誕ん七八歳の比より万人は勝也村民皆家の子童と稱は十歳よ
て父乃憂ふ丁ひ十二歳して大受明徳乃論を講は聞人は皆感
ぬ日郷西方寺又入て不勅明王又祈教して日國赤徳法師
乃法流雲南祥和尚の弟子とありて出家しぬ後弟子凡は百人
あり諸國に度せし寺院を記とす其教五十余ヶ不元禄六年
九月遷化以年七十二歳元文五年又十年又たつり大法正眼國
師と謚あり

○盤珪法流と印板あり世は是と云ふ又吾世と云ふ雨乞乃秋と書る
の意をこゝろ白挽歌と制し教へぬの踊らしめ又須臾して雨やう
とつり今且例としてうごまらん
播州揖保郡溪田村不徹庵の開基真開後尼のり禪師よりの御文の字
便り西暦はす一筆ア入は其れと云ふも此冬は雨種はやぬり度ね
け方何のうく居はすて心易は御修妙妙心は心け度ねはやうけ
度ねは去さく度ねは去さく度ねは去さく度ねは去さく度ねは去さく
度ねは去さく其心と御修妙妙心は心け度ねは去さく度ねは去さく
度ねは去さく其心と御修妙妙心は心け度ねは去さく度ねは去さく



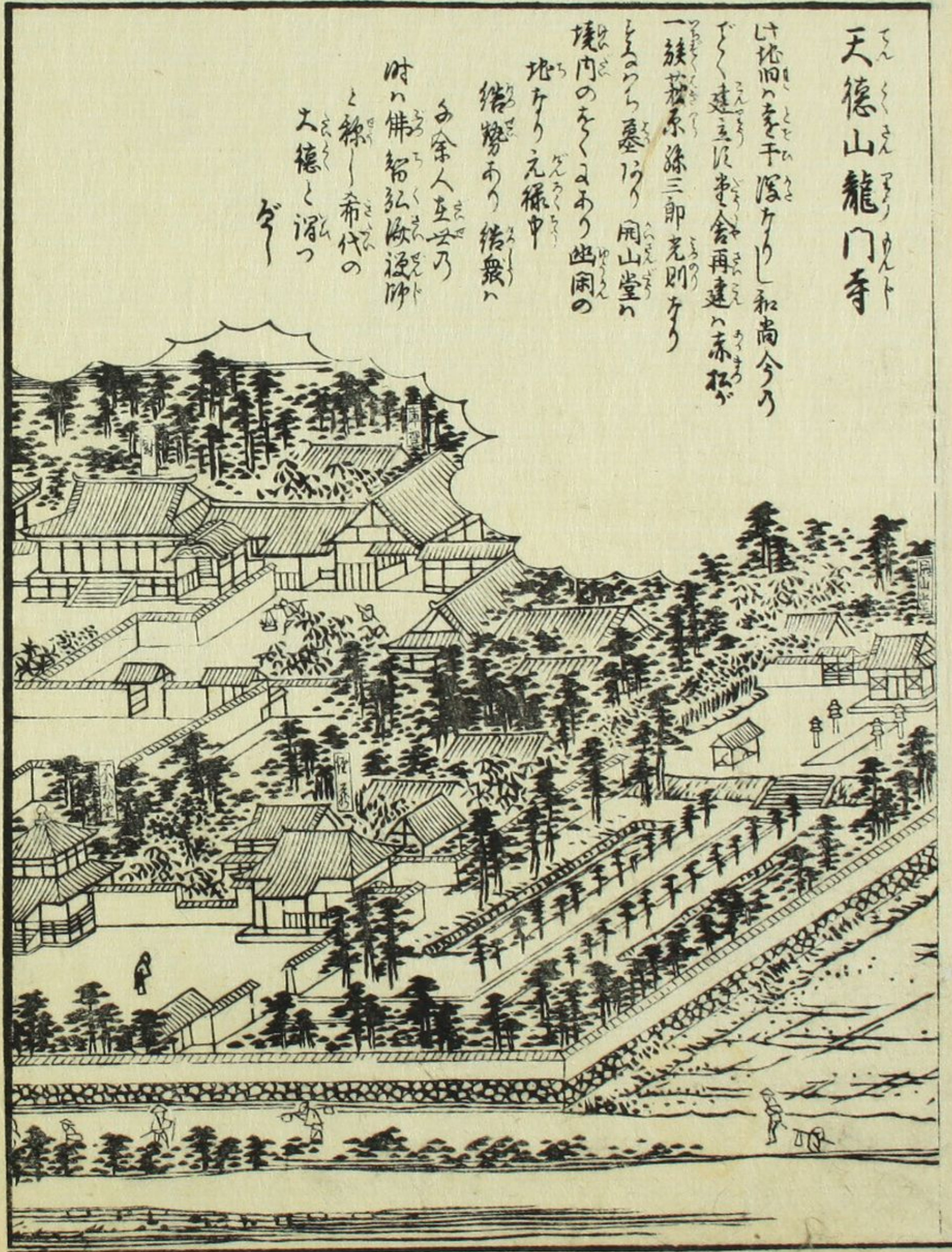
天徳山龍門寺

け地内を千原ケリし和尚今より
 かく建立尼衆舎再建の未だ
 一族藤原孫三郎光則ケリ

とつら墓所 用山堂の
 境内のそとあり幽閑の
 地ケリ元禄中

結勢あり結衆ハ
 多余人立云乃
 時の佛智弘法没所
 と稱し希代の

大徳と稱つ
 今



又抑る意ともしめ我本心なりとすり念をたもれしす抑と能合点す如
常く万のり又付福んよ又合ぬを肝要よと如只本心と又明ら
ら如くハ別又合点は入るやいふまじくゆりや成事とゆりや却てゆり
迷ひや只本心の神より念をたもれしすのりとのふりよとよくくハあき
めい人の若く付ても悪く付ても世間よはけても佛法よ付ても人のりよ
付ても万幸よ付ても抑る意よ少しも貪るで依りて起る止むしよ
此如くハ若福んよ本心よ叶ひやい念のんりやいのるんよ抑りハ
念よまたしそふるん本心とありも乃ちあきまらる本心とよくくハあき
うりて如く何りも抑るるや入るをいし

穴栗川 龍也川の末流
其奥尾ハ生國丹波國信名ハ原とてとハ秋人之盤掛國師の御子と如利
榮りて奥尾後尾とてく殿室今あり

箱水清水 細干夏津村山下あり
十水の其一あり
箱富山園融寺 箱富村あり 箱紙金泥
り後ありそ傳来と云ふ

伊津の浦 其の浦ハ海に志願とて石を築あり波濤の付りく乃大石
乾てりく近瀬の者家より敷と流く有るあり波本親と云ふ
是より室津まで一里乃間と七田と云ふく南海邊く山手徑の石
壁の端と傳ふ其行ハ志流く石を築るの山室又後耳七ツの入津あり

て其間道を上下に 但し一里の間路りの取ありりあされハ不末一挺二挺とての
逐連あり其甚絶業あり尚画よと云ふ

城山 室山之西ゆりの
此城ハ元弘の以赤松次郎則村入る園心築る不と即園心の端
子信濃守範資の三男幸輝都女由教と日園心の次男範守守範
の次男雅由女則教と兩人籠屋ガ建云ふる氏郷西國邊の附新田も具
先とて遷て播州よ下向一江田大城とて室山の城と云ふハ赤松討まけて赤
穂ハ退く其後中絶くさる園心ハ六代の後流赤松兵部少輔政則攝後
三州安城の附け城と修補して執事浦上守範守則宗とて守らる
其より石見守村宗則守政守小三代相續ハ元弘に赤松政則死去の後
是城の城を二代目乃政村と浦上守子確執事村宗守心を企てり
龍神ノ城を赤松下野守村秀政村より幕下の人々小太丸の筑内海御
解任龍神を御守平舟中守に及城守園山兵庫下五百金鎗を
差向て室山の城と攻りけ勢大雲寺のら下より明津山のきよとての面三町
馬を打入我ハ籠城よえよて備つけいよと考考りり杉原城中に政宗
乃嫡子孫進宗景の婚姻よて酒真守のゆりハ不意に打たよと確執
されとて政宗古老の勇ゆりハとうさ下知とて「愛と愛と我ハ
あいにかり今ハ嫁娶せし宗景の妻二八并かり小長刀とて教と教と
羅ふと後ハ自宮」たる多勢の考ハ後く又妻入りハ政宗今ハ叶いと

あいにかり今ハ嫁娶せし宗景の妻二八并かり小長刀とて教と教と
羅ふと後ハ自宮」たる多勢の考ハ後く又妻入りハ政宗今ハ叶いと

急いぐ渡

徳島の五ヶ所あり 瀬の
老于相とせくま
とあ訂けり

獅子岩

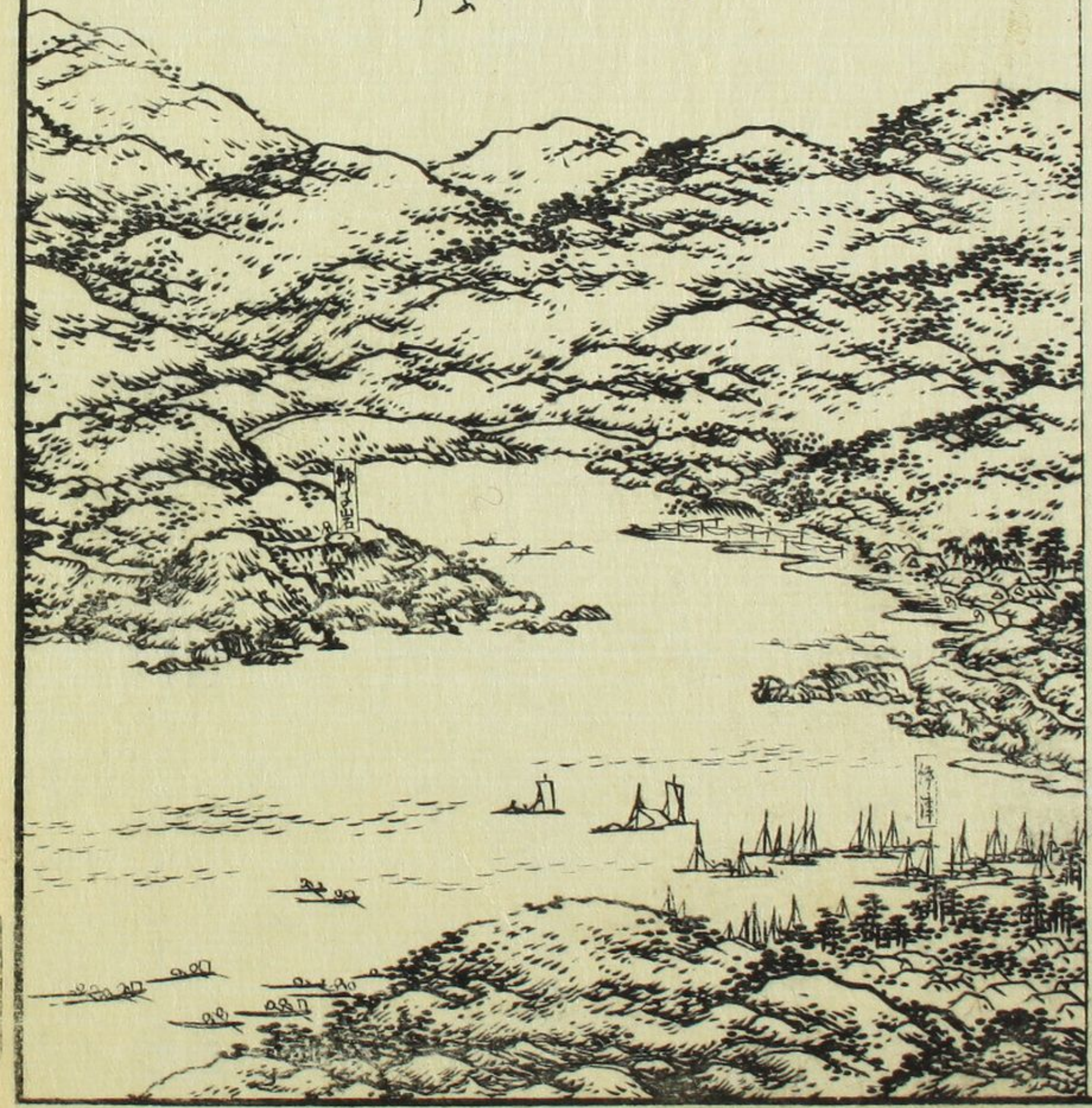
七曲の中よりあり 獅子岩
路路にあり

炭焼谷

七曲の中よりあり 炭焼谷
石の樹木炭と焼し
る

とるる石

大石船は横たわり
瀬にて海より入り
船の入りは



七曲舟

傾城嶽 石塔

七曲の中よりあり
室の松女はのこり
海の中とあり

山伏嶽

山伏の尾流
あり

銚口岩

地獄谷

七曲の中よりあり 地獄谷
金銭の車馬は
はたしはたし



室津

平海ノ端と云
 うては箱と敷
 于はく母公に
 候は浦へり子
 家又出た
 門崎
 山峯つきの崎
 右に城門の跡



池の濱

若池ありしれと云
 又西向ともつらん
 空海入江の裏より
 へりて空海は又は
 去に西向のたつた
 是に入江の東に池
 のま村と云ふと大
 抵に又その内三
 赤川より復た池
 なるの候と云ふ
 といふにまごふ



嫡子字景宗を依り系州に廢し其身心志を以て明石大炊炊又依借せしむ
切後氏死骸を見性禪寺に葬り合浦常印大居士と号しけ附永祿九年乙
丑十一月為燃して其跡むはしを後姫治の城を松平下総守清匡度々の城に
二番小屋を建て其見の兵卒二人を以て是難船取ひりて又南方古城門の
流に惣務事と建て客取同苗の傍りて以東方水産室着水といふ傍り
廣室死の昔城郭の用あり

室津

室の泊 室乃浦 室津の檣州の一都會ありて西國大名参
勤往來乃長岸と定り又系船の津とも定む帝畿と去りて十
二里山の三面を裏して江灣の一方は海上百里義景と初名し
泊船の池中は松平とてく張客の波上は枕と安んじ峯は雄の
弁と郷語し山岸には松女の系竹の堀き圍守の賑う海士乃網子と階
せ漁又ま鮫若樂室窮覽の界あり。室とは人の居室のつちをい
江のなまのこりたりたふたてり。舊傳曰非代のむじけ津又
夏蔓紫葉ありて晴夜乃てく道治も見へまこり。やは加茂別雷

非日向國高千穂峯よりけい又親向く夏蔓を依拂ひ移しと始
として今の繁昌且びりて西海村素乃客取風波と凌ぐ要津
とあり高藤唐士乃使客商人の交易あるとけ津は繁昌ありて
るをより又大岬の令華縣と号して令華津とも号する

むろの浦のせとけ移るる鳴鶴の磯に波はぬきとをけりも
山のなまのこりてせぬ夜は室の海にうまいひよりとて乳每人

け余秋後これを暇に。貫之を悦日記よし津のつちを
公任御前詠集曰若系る推周防守とありて下向り附け地の風景と見く

曉入長松之洞 巖泉咽号 嶺猿吟

義滿之處清池

夜宿松浦之波 青嵐吹号 皓月白
夕り中睡け社に加茂のともやまこのこまり乃社かりしその津よりまけあせ
て津よりしりくは社よりまきまきとてありひつたりたる敷うりてまき津巫
とも集りて振びたりこれの津よりわの雨風乃ねむさとの津のりやと
ぞまき色つ雲まけんの附らういりありけぬくのわよりまきの見く
そぞろのつち

室明神社

室の津明津山より 正殿に加茂別雷宮を津宮東に行國法を田

社西に芝布祢社若宮之左田乃東に枚尾社正殿の後に河合社下橋
御祖津之其西に權殿之二層塔は多宝佛と奉るなり

と一人建まて其堂として 八幡宮塔の西 棚尾祠に足門 岩本橋本相掘田
祢津守に任階ありしなり 祠の横にあり 白紙社 多層の 禮樓 中津津宮之加茂忠康云云に奉りて修らる

津宮寺送跡 今も奉りて社人 園氏の居宅と云

津傳曰抑當社乃津日日向國高文德峯二上嶽より活山二系山へ

遷らせ終る其附け地は須臾畜通し終に厥后加茂一光徳乃附
津城三十六人奉祀と云ひ終るなり乃及昔を伐拂ひ湊と聞き

終ひ一斧沓謙の三刀をも奉祀の社と崇めし 是れ奉安堂所ありしに
例祭に小五月祭りと稱は是加茂駿馬の社なり準じると云その

附當社乃津王上加茂七家の内を居大踏氏都より下向きて此後
所は後々舊例の祭式あり 津傳の例奉りは乃及今も奉るなり 是れ奉安堂の

日遠道の清人橋麻乃とく其日の賑ひ云りん方は町中おは家宅

を飾り一門加因乃奉宮泊社の縁人安又集ひかくしに群一津
今ぬ不文は祭日若後九十日津の家々の業を停て祭式の調度の

とみ羅とる室都の葵津蔭みつきり收羅する祭式ありたり

天王祠

明神より奉南の林間あり奉津年改天王六月七日は華治の祇園會に奉りて

佛通山見性寺

佛心の方より奉奉 佛心の方より奉奉 佛心の方より奉奉

正洞院 中真より授意し如門を在中和尙乃開基なり大地より云 心法寺 寺

津涼山津運寺

友君墓 津涼山あり津涼山あり津涼山あり津涼山あり津涼山あり

因光大師所縁御敷 當代天明寺中より再ひ 大聖寺

觀音寺 寂靜寺 德宗寺 不二庵 法釋院 津涼山あり

御茶屋 津涼山あり 津涼山あり 津涼山あり 津涼山あり 津涼山あり



画は竹下
虎揚の
黄揚の
八捕
校の
奉納
と
と



室明津

尚社修葺の什宝

源朝朝の南判

寄附状

社名として下橋戸

の御内按志林

田室市尉以上

三ツの辰文治二

年九月十六日の

寄附状之其外

歴代將軍家の亦教書

判物等教通あり

平重衡御記

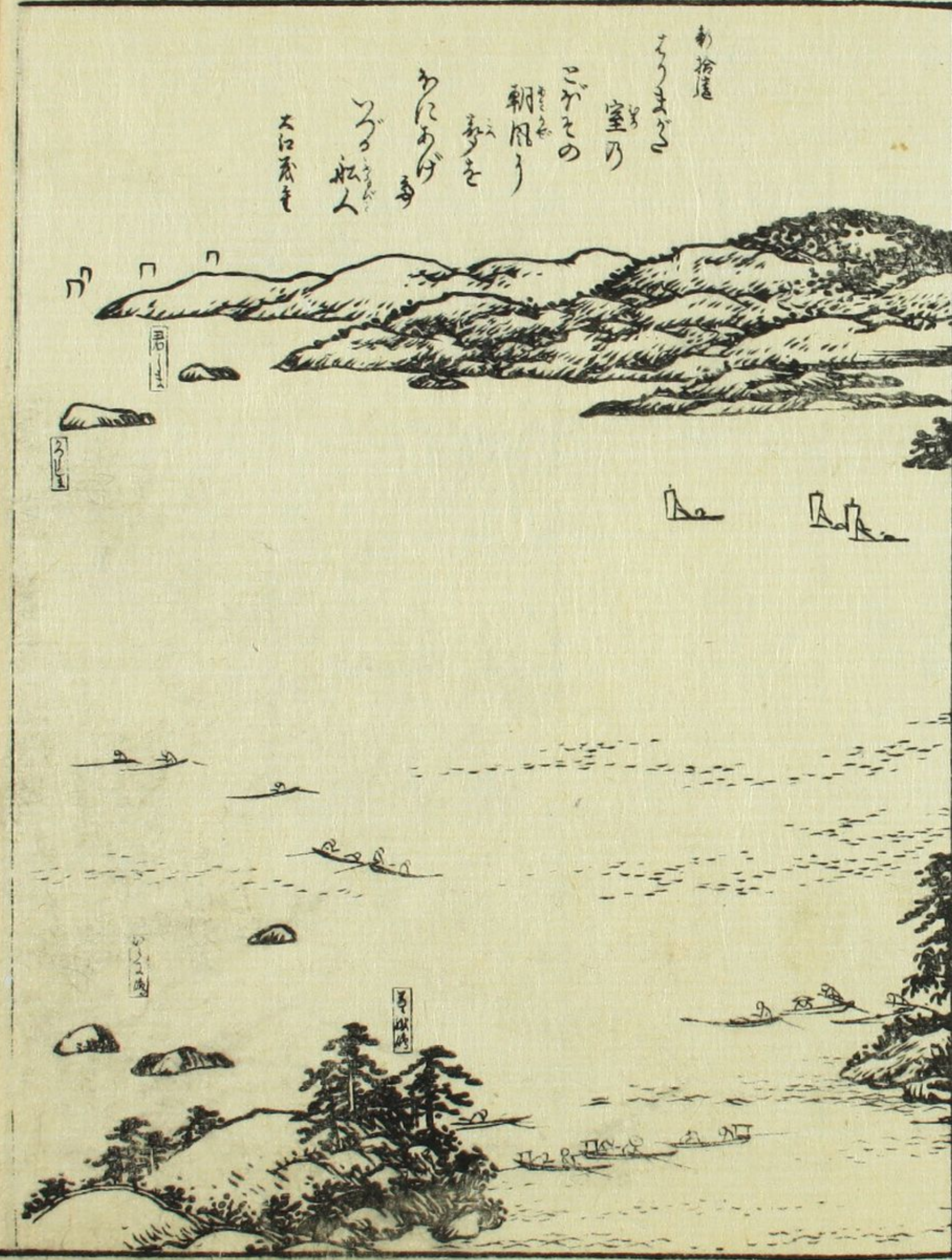
表の方要本表紅

花和宗天授漢書

面画の雲月裏の



右法
眼の
画馬
津馬乃
仕丁二人
づとお國
終つ大
元信を
あり
弥延長門守
之家と書凡



南拾遺
室乃
こがその
朝用
夢を
わたあが
つる
人
大は

津ふくれ
 をのくた
 女てた
 らは
 如聖堂
 幣と掛
 奇龍
 の津三
 本の津
 事仕丁
 是を携
 て借
 澳酒士
 十人弓
 左海次



小阜月祭禮
 町のけい
 二人で二
 つりり津
 ころまひ
 き帽ま
 ものし
 の秋と
 御善
 の一
 一人の
 と掛
 水于
 と十二





○藤記院准后義満公殿御流記云 周防國ひろととふ下はむりぬいりし身の普賢のまかや押がまんちうひろ人み若みく是こそ生身の普賢よとくけ玉のたふ成押へたるあせりし玉のまみぬは面白し若とく切あれてそひへたる峯三ツにツ並ひつ松拍ひろくとよ深山本若抄いさぐりて浮雲うとくくまう云○今案撰集抄は室といひされども江流抄は月法は月付て水橋といふ又院抄抄はははとく又撰集抄はた女の歌よまは周防の室様也又義満の元よも室様と室様も即松若とてた女あり普賢室あり亦江口よ若堂といふを建て普賢を妻とす○性室上人普賢とんる若とるしの安流は疑ひる」といふも退きてもととよまはよりいひにみある其れ若若女白拍子の名と付るふ今のてとれまはしきりのよはあり既り法盛の巻せし白拍子と佛低玉低女又乳守の傾城と地獄又朝持拜哉と若のた女の名成出せし親善小親善文殊普賢とていへりこれの室よも普賢といふ傾城のあり」と人の戯言を性室に申さるる心より

尾屋浦

小湊荒戸のつぎにた女若小舟とていふ向法上人の教記に「是即尾とぬてけいし尾をむとびけいしをばして性室の素懐を遂げけりよりけ谷ありといふ

竹園尼 向灘の中より女のた女磯中納言歌基脚よららに」とて尾屋へのかり又此地は撰集抄に「尾とぬり佛道と修せ」とり竹園の尾とら今と人修てタコウと云ふ
 播磨國竹の園といふ下は尾と結と又もた女の名すいふと「竹ざりたるとうや或時中納言の内の人乃船みのりて西園より都さよ入ゆきる成何いんく髪と切て際奥紙も引包てかく書さる

ははせぬうたをらめのもる」といふも「神ぞうらぬ 竹園尼

陀羅尼濱 竹園よりけ尾を修してあまふ子手陀羅尼と稱し「たうりけ名ありけ浪巖石崎にて風景ありけ尾のまお佛と出巖上よ安流して尾より船若歩初を運いしよりけ所を 相浦 高海西南の入口ありむり「そももぬ拍の今佛修しとら」 合寄 大井ありし是れ今も浦邊極拍の枝まきまき也 瀬戸 瀬戸の入口をていし波あり「尾瀬戸といふ山の山若其南に敷敷其西を鳴鳴といひていふも名不あり

室の浦

室の浦の端門の傍なる鳴鳴の磯に波ぬまはるる也

花川水 室より西一里あり 向灘 室津といひ向灘は浦とてとて向灘といひ内よ中流の浦と蓋戸は水早流石雨降 唐荷崎 室明津より東南里の海中あり室津といひむり「唐船被換したる所をいふ」

所名

唐荷崎

所抄よ又又傳の唐荷崎の唐若とて三つの磯ありとて「唐船被換したる所をいふ」





妙見山
親
音
寺



大随明神
板城の唐靈神
松陽より二丁
むろのゆけ
境内方八丁宮の老
方の丘ハ眺屋
傍り別當り
宝珠山妙見寺と云
其基中
用基塔中
十六坊天
院



備後三郎
高德

送りしりともん 備後三郎高德 ○高德の初回義貞に属して俸禄の
 國へ誠よりくるが義貞死後の後備不國へ立ゆり思はれ又深き居て尚
 も本意と違せしるる新田義治と喚なり諸國不々又回をてきし
 て拓き集り不々又隠し居るふ又行りてきき氏又淺きて送考
 とあり壬生の遠く又切腹乃若後しこれを以て餘黨の若友教
 にありこれが高徳が支度お遠して義治と云ふ信濃へ海船終ふ
 別發して志純と号し其後高德が終る不と云ふは
 ○武徳近奉の極をいふは平二十五年六月十三日と刻む正平の年号二流
 和州多武峯に死ししは是不極の人の建つるなり
 雲谷山常樂寺 板敷を
 龜乃甲 赤徳の極下の川に石を築て通流其秋ら龜の甲は終り供養
 尾崎八幡宮 板敷の南尾崎村あり別當天台宗金光山淨土寺長十一年壺水は尾門
 再建板敷の庚十七ケ村の古産津とい別當八月十五日赤徳極下よりも物
 新濱村 尾崎の末にあり尾崎の内匠職の附海と理して藤平是尚後難と云ふ
 大石城へく大石と云ふ久しして和能と尚美舟的形の人を擡て陸と渡りて
 赤徳極とく日本第一の各品とい

赤穂

同製

陸奥

陸奥の地面度と一町より七八五... 一畝のりる小埴めを... 潮を引入れて... 潮を引入れて... 潮を引入れて...

方り密籠の其度と一といふ... 乾しよき... 乾しよき... 乾しよき... 乾しよき...

御寄伊和都比賣社

伊和都比賣社... 境内甚絶景... 境内甚絶景...

唐

唐の... 唐の... 唐の... 唐の... 唐の...



谷塩





尾崎八幡

尾崎川 中村流して城下を流す

中村 城下の町を流す川に二丁目其地あり三丁目 中村 城下の町の川を流す 中村 城下の町の川を流す

赤穂 赤穂の南にありては赤穂を流す川なり 赤穂 赤穂の南にありては赤穂を流す川なり 赤穂 赤穂の南にありては赤穂を流す川なり

を附属以其財を以て此城を築く慶長八年池田輝政一統の後姫路より郡代あり河内守日政綱日輝貞其後清田内匠其後永井家其後森家○城内に五ヶ所郷に三郷村教都て九十六邑城下の所甚多買しては民形と並べく功用足らざるは赤穂街の造りより海道といひ昔に周世坂と城に百目堤と姫路といふとあり舊赤穂と城に清田家と森家の二つに依り軍記に依り清田家の上月城(加勢)の人殺三ツ石の坂にあり是を赤穂と名づけ道を通る所不能絶也と傳へて城を築きしと云ふ小治政の同道あり

墓雲山 華岳寺 坂を村より開基 清世候建立代に墳墓あり善徳所と云ふ 墓雲山 華岳寺 坂を村より開基 清世候建立代に墳墓あり善徳所と云ふ

左右に大石内苑を親る其外に十八人の義士の石塔並みとして江府泉岳寺に墓あり(忠義塚の序辭を挙て銘文の略と)

忠義塚序

元禄十五年十二月十四日故内匠頭浅野長矩朝臣臣大石良雄等四十六人相與謀為其君報讐夜襲殺吉良義英朝臣束身歸官官分拘各處踰年議成越二月四日有命遂賜自裁云今不具其事蓋候自祖考三世得君赤穂恩惠之洽巨民一體遺愛之深其事且五十年語一至此猶潸然泣下近年 府臣某為之嘗諸君墓於城北花嶽寺中刻石表為民莫不悅合茲春三月遂重伐巨石立碑於墓道之東屬廉為辭夫諸君之烈譬如日月之麗天萬世罔隊不假人言與彫刻然非此無以慰思焉則不有斯舉又將為何如廉也郡人不可辭謹為之銘 銘畧之

寛延三年庚午三月十四日郡人 奥藤利栄 松本善宣 柴原救 長 奥藤利徴 田淵春元 柳田吉甫等建

因云 ○けは江忠廉といふ平彌号と徳陽といふ文徳傳りたる一先生之著述と云ふと云くありと世に流布せり人の知る所也之赤穂農業家の子とて樹



少くも其の勝進人々を稱せらるる壯年より東涯先生の門人とあり其の學を愛
學ありて後龍神服板履聘應之聲一儒官と稱ふ今又其子孫あり。先生
士三の附たり大石の館又出入あり内務女其の女と傳へ後一人あり
んと稱ふあり或曰後世推挙し所ありて經義一二章と溝せしむ其
辨理明々たる内務女も大石の館に連たり飲食の事とめ引出物
とて内務女幼少の附の指料を致付の刀と稱ふ其の刀今又其の館に
傳ひたり。○其の館にあり又世傳の文人の書以て銘を乞ふるあり也

明王山遠林寺 滅山和尚の開基なり 禅宗智積院末之裔の池田家の善
提不取又舊号玄興寺とあり玄興の釋政乃法号なり又息三三人の位
牌あり法持家にありて改号して新觀不とありて今又志あり 後陸防寺
又位牌を後以

大石屋鋪跡 今明庵ききやて門のむらうのきき地なり屋敷の
西塩淡 甚廣し。城の海中より小橋あり 大津 入海の津之今塩淡と
愛宕石大権現 小井中村あり其言宗遠林寺末岡山寺如勝軍地孫大郎坊二子の靈
本とて赤松の徳守と正保年中又近き正純後持若の令ふより之後

長樂寺

郭の權張其正純の親とて遷まれば即正純と稱ひし所ありきは之
砂子村あり天石宗徒内東西百十間
南北七十間并龜年中更創り基

尼子山西山寺

尼子墓 候市町あり墓の境内あり其言宗
高世傳心寺末岡基の基

若狭野

奥院慈恩寺村あり和泉郡のむと小武部と稱ひし一寺と云俗傳われども
此石澤かたはらにありたはらに小武部と申すい一家ありしなり

和泉式部省本

雨内村 此若佐也又苗栗の本あり里俗の云苗栗はこころは
本林五郎ちまといふ者あり京都より小武部と拾ひ入りしと和泉式
部家より移りきておしし雨のうたは栗の樹のむら守りて

志原乃間よしのうらうら 易ぬと今いれは

此歌を今難く出で歌ふは遠くよりそよよは秋の歌よつとては物語をなはれり出せしもの
かりし伴勢物語の例とて実なりははらに和泉式部書山性室上人よりして送りしもの
秋の拾遺集にありしなり和泉式部苗栗の末裔なり夫保昌よつとていふは苗栗の
まはら和泉式部小武部とも上東門院を仕りて流寓のゆゑ苗栗ははらに苗栗の
苗栗の末裔なり西山村岳山あり里清日やる後合戦の後和泉の苗栗苗栗早を苗栗と供しはら
苗栗の末裔なり西山村岳山あり里清日やる後合戦の後和泉の苗栗苗栗早を苗栗と供しはら
苗栗の末裔なり西山村岳山あり里清日やる後合戦の後和泉の苗栗苗栗早を苗栗と供しはら

苗栗

西山村岳山あり里清日やる後合戦の後和泉の苗栗苗栗早を苗栗と供しはら
苗栗の末裔なり西山村岳山あり里清日やる後合戦の後和泉の苗栗苗栗早を苗栗と供しはら
苗栗の末裔なり西山村岳山あり里清日やる後合戦の後和泉の苗栗苗栗早を苗栗と供しはら

或曰困心功名致奉て若く又其美のみふめはかゝり我々のみふを以て若
のあまらけは後々正威の忠と云ふは困心と表裏せり若くや後々あひて守護
職と奪つてこれの正威のあまらけは我々の心のみふを以て是れ人向の
るとの困心其表裏せり我々の心のみふを以て是れ人向の
食養と二三日奪ひ取せしは是れ我々の心のみふを以て是れ人向の
て又いかに付瓦を以ては是れ我々の心のみふを以て是れ人向の
苦繩古城 赤穂郡佐用の麻苦繩村あり

百濟僧惠便古跡 矢野の寺 峯相記曰 欽明天皇の御子削守登佛法と云
てる藤の傍惠便古跡と攝摩尼流に二傍矢野の興は三年居住後遷居
る右次郎花次郎といふ守登記して百三又傍と云ふは峯相記に之
り今日本紀と撰りては惠便の攝摩尼居るに其時佛法は流布せ
は門と人の多敷せり成以て迎都又遷居する者あり守登記と流布
るはありは馬子惠便といふは出づりしは守登の十三年あり
守登記より其後八年用明天皇二年あり守登記を以て惠便免
され居るより後惠便の百餘より来るに崇峻の元年守登流記乃三年
あり惠便攝摩尼居るに惠便といふは日本に来りし惠便と右次郎惠便と

左次郎といは昔年代を考ふるは似しけし時惠便といは遷居する傍の
今一人ありこれと惠便と混りたるや今け侍の里佐は右次とも左次た
るは似しと云はれあり

所名

舟坂山

山は攝摩尼古蹟あり

大聖寺

安室御あり

明惠の氏義村の當りなり感樹山と号す

舟坂山 山は攝摩尼古蹟あり 備後三郎高德墓 多徳何國に死すと云ふ

卒性三宅氏といふり 高德讀書を好む後醍醐帝隠居國へ遷
居る時高德舟坂山より候て帝と奪んとしり小山陽道と經
りて攝摩尼今宿より山陰道を出て板板より車駕既より
る事遠くして英他國院の庭よりせ給ひぬ高德が謀室よりぬ
かくて疾入御籠より候乃拊と研りて

天眞室句踐

時水魚一尾

と大文字の書附より自上 睿覽有りて龍顏殊に霽くと云り云

後遂又正威（ついでに）力（ちから）よりて遷幸（うつりまわ）ありたりしに誠王（まことのおう）勾踐（こうせん）に據（よ）りしと
 ありしと危（あやま）難（がた）謀（はかりごと）略（りやく）をなして誠（まこと）又遷（うつ）りしに終（はつ）に吳（ご）と亡（な）しぬるに正威
 忠義（ちゅうぎ）又（また）比（ひ）して書（か）する人（ひと）の延元二年（えんげんに）新田義貞（しんたのよしさだ）兵（へい）と舟（ふね）板（いた）又進（すす）めて
 合（あ）戦（せん）ありしより昔（むかし）に右平記（みぎひらぎ）ありたり
（ま）本（もと）に
 風（かぜ）とや（と）立（た）白波（しらかげ）とよそ人（ひと）ぬる坂（さか）とく見（み）るそあやうき 漢（かん）人（ひと）とや

播磨名所巡覽圖會卷之五六尾

五十四

秦石田之彙輯西播名勝也
 源寺西遊其山水寺祠了
 園之兩以雲生寺六骨矣既
 還淨寫備次編為一帙為目
 凡一百頁遂併授之割刷
 氏云史言人進士意之所適

山水其甚焉而山水之所以
愛在位置向背濃淡瀟灑之
中矣位不正流淡死可狀非
年可狀之無以可狀無其
焉而畫之所以其狀者在
墨氣駿之間矣今西搢山水

之尤其者而狀之于隨拙之畫
之不足其固也而所謂以墨灑
髮時之者亦澁之汨沒于刻
刷之中矣其復有畫亦哉其
少其亦哉其有人其亦其觀乎
其亦其乘除于其間可也

享和三季癸亥春三月
浪華藍江中直跋



五ノ四三

文化元年甲子夏四月

大坂書林

柏原屋清右衛門
柏原屋與左衛門
勝尾屋 六兵衛
塩屋 忠兵衛

